

【氏名】和崎 聖日

【所属大学院】（助成決定時）

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

【研究題目】

ポスト・ソヴィエト期のウズベキスタンにおける「乞食」の現出と農村地域における
共同体の再編に関する人類学的研究

【研究の目的】

本研究の目的は、ソ連解体後のウズベキスタンにおける農村地域の共同体の再編に関し
て、「乞食」など

社会の底辺に位置する<社会的弱者>の生活動態を理解することである。同時に、本研究
は、社会主義時代の無神論政策から解放される形で再生したイスラームが<社会的弱者>
にどのように関わっているのかを明らかにする。現在、ウズベキスタンでは、「乞食」の
増加が社会問題となっている。首都タシュケントの「乞食」の多くは地方出身者もしくは
ソ連解体後の都市移住者であり、この背景には地方、特に農村地域での経済悪化と生活水
準の低下がある。本研究では、地方・農村の生活実態を明らかにすることを試みた。

【研究の内容・方法】

調査地として選んだフェルガナ盆地のナマンガン州は、イスラームの日常生活への影響
が強い地域である。その中で、綿花と小麦の収穫とその加工を主要な生産品とするポップ地
区、なかでも人口1万人超で人口密集率が相対的に高いといわれるサング村で住み込み調
査を行った。実地調査における研究内容は、サング村における①生業形態など生活状況、
②人間関係のネットワーク、③社会規範とイスラーム実践、④村の「乞食」である。より
具体的には、①生活状況に関して、調査地の就労・経済構造の変遷とそれに伴う共同体の
再編を調査した。②人間関係のネットワークに関して、誰とどのようなつきあい関係が形
成されているかについて調査を行った。現金を決定的に欠いた現状において、人間関係の
ネットワーク形成は生存に関わるほどに重要な要素である。③社会規範とイスラーム実践
について、農業セクター零落など国内全体の経済悪化のなか、イスラーム的価値が、国家
経済システムの弱体化を補完すべく、いかに人々の日常的な生活営為の中で社会規範化さ
れ、実践されているか、調査を行った。④村の「乞食」に関して、数名の「乞食」の生活
実態を参与観察と聞き込みに基づき調査した。

【結論・考察】

村の社会階層化をめぐる、年金など社会保障制度は、<理想的な時代>として共有され
ているソ連時代、その多くをロシア・モスクワに依存していたため、独立後の現在におい

ては、その給付額は激減するに至るという背景を析出した。また、ソ連時代に公有であった村の農地は、2003年のコルホーズ解散とともに、旧コルホーズ幹部層に管轄権が<不公平>に移譲され、彼らから利用権を購入する富裕な個人農はマルディコル（日雇い労働者）を薄給で雇い、その結果村内での社会階層化が進み、これが<不平等>として認識されるに至ったことを明らかにした。多くの村の既婚男性たちは、主にロシアに出稼ぎに行っているため、マルディコルの多くは既婚女性とその娘たちであるという生活実態も明らかにした。村の生活は自給自足的であり、親族・隣人・同僚・同級生の間での食料など物質的な譲渡や互助は頻繁に行われている。断食明けの祭りや犠牲祭などで、モスクやお墓の前で物乞いをする村人はいる。彼らは主に障害者であり、普段から町の中心部やナマンガン市に移動して物乞いをしているが、彼らへの施しはサワップ sawab（善行）として推奨される。供犠された羊の貧困世帯への配分（ザコート zakot：義務の喜捨）も、村の富裕世帯により、自発的に、またセル・ソヴィエト（村ソヴィエト）を通して、行われている。現在、弱体化した国家の経済システムに代わり、こうした親族関係やイスラーム、そして<ウズベクであること>を軸とした農村民衆の主体的な相互扶助は実践されている。これらは<ムリモンチリク musulimonchilik（ムスリムがなすべきこと）><サングチリク sangchilik（サング人がすべきこと）>と表現され、自己の拠り所ともなっていることを析出した。だが、こうしたポスト・ソヴィエト時代における村の秩序は、出稼ぎ労働者を広範に受け入れているロシアの移民政策に極めて大きく依存している側面も併せ持つことを明らかにした。